『友弾』によせて その2 OB編

「退部させてください！」から始まった

八十五期　横田雅夫

今思うに、私はどうして射撃部に入ってしまったのか…？

そういえば友達に誘われて…。

その友達はというと…一カ月で退部。

私もその一カ月後に「退部させてください！」と申し出たのだが、友弾Ⅱ号の中の『我が青春のゴルゴ13』に紹介されている個性豊かな先輩に「だめだ」と言われ、その一言で私の四年間の射撃（部）人生が始まりました。

その四年間での思い出は…三年の時、学連の強化選手に選ばれたこと。全日本学生で五位に入賞したこと。林崎杯を獲得したこと。三段を取得したこと。…などではなく、四年の最後に悲願の一部復帰を果たしたこと……。

いや本当は、ハチャメチャな個性豊かな先輩方のことが、一番の思い出になっています。

＊麻雀を知らない一年生当時、朝まで麻雀を付き合わす先輩。

＊三年間に三度引越しをした先輩（もちろん手伝いに駆り出された）。

＊合宿の時、酔ってトイレで寝ていた先輩。

＊銃ケースを担がないで引きずっていた先輩。

＊大会の時、下駄で来た先輩（その時の他校生の目が忘れられない）。

＊応援団の団長にしか見えない先輩。

＊射撃練習をしている所を見たことがない先輩。

＊銃を持たず竹刀を持っている先輩。

そんな先輩が今でも私の脳裏からはなれないのです。

その先輩方がいた時代…私が入部した昭和四十八年当時の射撃部はと言うと、渋谷校舎の屋上に即席につくる六射座での射撃練習。革ジャンの数は少なく、それを補う布ジャン三着（他校で使用している所はない）。靴は共用のキャラバンシューズ。ミトンも共用のもので、とっても汗臭いものでしたが、それも数が足りないので、素手や軍手の者もいました。今の様な射撃専用のズボンなどなく、ジャージのままが多く、古着ズボンをはいている者の方が少ないぐらいでした。標的は十二文銭、標的交換機などなく、銃にいたってはファインベルグバウの新型はほとんどなく旧型のものばかりで、しかも一挺の銃に三・四人の部員が付いている有様で、射座が空いていても練習が出来ないことなどよくありました。今では考えられないことです。

しかし成績はと言うと、一年の時（昭和四十八年の春から秋）と、四年の時（昭和五十一年の秋）は一部、二年の時はあと数点で一部といった具合で、信じられないくらいです。今思うに、それは部全体が「射撃なんかどうにかなるさ」と明るかったこと。昼に全員でトレーニングを続けたこと。そして個人レベルで前向きに射撃に取り組んだこと。たとえば、シーズンオフ（学年末の試験中なども）でも射撃場へ足を運んだ者、時々でも家で据銃練習をした者、筋力トレーニングを続けた者など、一歩踏み込んでみたことの積み重ねの結果だったと思います。

とにかく、先輩の事、同期の皆の事、後輩の事、色々な「思い出」が山の様にあり、とても書き尽くすことができません。しかしその中で、一つの大事件（？）がありました。正式のエアーライフル射撃場建設です。一年のころに既に話はあった様ですが、具体的になってきたのは三年か四年になった頃だったと思います。何回か設計図がやり取りされ、打ち合わせをし、四年の終りにやっとそれが完成した次第です。射座は九ツ、手動ではありますが標的交換機を備え、本格的なものでした。我が部としたら画期的な事なのですね。場所は今の射場の近くで、木造の寮の横の空地に建てられました。現役としては、使用していませんが、OBとしては何度も足を運んだし、沢山の後輩達の顔が思い出されます。

正直、規律の厳しい部だったと思いますが、そんなことも含めて射撃部生活が、今の私を形作っていると言っても過言ではないと確信しています。

現役の部員諸君も、射撃部四年間をすばらしい思い出にしてほしいと思います。

そして、私達の時代が一部にいた最後ではないと確信しています。

またいつしかは、日大・明治・中央を脅かす存在になることを期待しています。

平成十年九月二十七日
自宅にて

写真
昭和四十八年六月二十四日、朝霞射撃場で念願の一部昇格を果たした本學射撃部部員一人一人の笑みには目標達成者としての風格が！
前列中央眼鏡が筆者横田雅夫氏（一年次）右端眼鏡下駄履き姿は「我が青春のゴルゴ13」の筆者中野康世氏（四年次）
〈写真提供横田雅夫氏〉